

world's end / 革命前夜

For adult only

mechi

Contents

world's end	3
-------------	---

革命前夜	24
------	----

このたびは、当同人誌を
お手にとっていただき、誠にありがとうございました。
お手にとって読みたいと思っていただき、ありがたく思います。

この本は、2021 年に発行した同人誌を受注頒布用に整えたものです。
お楽しみいただけましたら幸いです。

world's end

1945年9月、ジャパンの降伏文書の調印をもつて、7年続いた第二次世界大戦は終わった。

この大戦が起きた経緯は今後の歴史書に詳しく記載されていくだろうが、簡単に言えば、1914年に勃発した第一次世界大戦からの疲弊と混乱、ベルサイユ条約による敗戦国ドイツの圧迫、依然続く各国間の利権争い、1920年代のファシズムの台頭、共産主義の拡大とアメリカと日本の台頭による資本主義世界のパワーバランスの変化、1929年の世界恐慌、1933年のドイツでのヒトラー政権発足によるナチの台頭が連鎖して引き起こされたものだ。

つまり悪魔の俺と天使のアジラフェルが人間ごっこを満喫していたこの地球は、20世紀になると世界各地で火の粉が舞うような臭い時代になった。

形の上では終戦が締結されたものの、まだまだ戦火の爪痕だらけの9月下旬のロンドンの街を、フリート・ストリート向西に向けてブラブラ歩いていた。

この大戦はドイツ軍のポーランド侵攻を受けて英仏が宣戦布告を行い火蓋が切られたようなもので、言うまでもなくイギリスも全土に渡りドイツの爆撃を受けていた。ドイツ軍の上陸こそ免れたものの、海路を中心に物資の供給ルートを絶たれた国は最後の最後まで困窮を極めた。終戦したところで必要物資が十分に確保できる目処は立つておらず、まだしばらく民衆の配給頼みの生活は続くだろう。

戦勝モードに沸いてはいたが目にする民衆は一樣に覇気がなく疲れ切り、俺が手を下すまでもなく辛苦や憤怒や憎悪や悲嘆やらなんやらが蔓延しているこの有様に、いい加減ウンザリしていた。

ストランドまで来ると、こつぴどい爆撃を受けて瓦礫の山と化したキングス・カレッジの影から、埃まみれの顔の男の子が走り出てきた。

そいつは「新聞買うかい？」と、シワの寄った紙束を俺に差し出した。